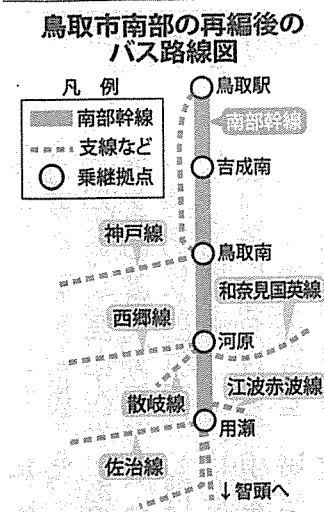


鳥取—用瀬19便増

鳥取市、10月から実証実験

公共交通再編計画

鳥取市は25日、路線バスを中心とした同市南部地域の公共交通再編に向けた実証実験の計画案を示した。国道53号を「幹線」、乗り継ぎの結節点から枝分かれする路線を「支線」と位置付け、運行効率と利便性の向上を図る内容で、新路線も設ける。2月に市民コメントを受け付け、3月に計画策定。ことし10月からの実施を目指す。この日開かれた市生



活交通会議(会長・谷本圭志鳥取大学大学院教授)で発表した。計画案では、国道53号の鳥取駅—用瀬間を幹線、枝分かれする4路線(西郷線、散岐線、佐治線、江波赤波線)を支線として区分。非効率とされていたバス路線の重複を解消する。

幹線と支線が接続する「乗り継ぎ拠点」は鳥取、吉成南、鳥取南、河原、用瀬の5カ所とし、これとは別に国安、津野、津無の両地区に

道の駅かわはら、鷹狩など5カ所を「サブ拠点」とする。一部の拠点では整備工事を行う。

幹線では最小10〜15分の間隔で鳥取駅—用瀬間を往復63便運行。現行より19便増え、拠点のみに停車する「快速便」も走らせる。支線では、幹線のバス路線やJR線との乗り継ぎを重視したダイヤを設定。便数に大きな増減はなく、需要に応じて一部の便を定員4〜15人の乗り合いタクシーや予約(デマンド)型とする。佐治線では、路線のなかった津野、津無の両地区にも対応する。このほか、全便を乗り合いタクシーで運行する和奈見国英線を新設。神戸線は現状通りとする。運賃は、幹線では距離制、支線では均一200円とし、幹線と支線の乗り継ぎで100円割り引く。

路線乗り継ぎ案内、高齢者の乗降介助…



バスアテンダントが配置される可能性の高いJR鳥取駅のバスターミナル

バスアテンダント導入へ

鳥取市は、路線バスの乗り継ぎ案内や高齢者の乗降の介助をする「バスアテンダント」の導入を検討している。年々利用者が減少し、路線の廃止や減便などが続く「住民の足」をサービスの向上で守るのが狙い。全国的にも珍しい取り組みで、同市南部地域（佐治、用瀬、河原など）のバス路線の再編に向け10月から1年間続ける実証事業の一つとして、試験的に実施する予定だ。【加藤結花】

市によると、98年に587万人だった県東部の路線バス利用者は10年には272万人まで減少。同市南部地域のバス路線の場合、年間約1億円の運行赤字を抱えている。利用者の多くは高齢者と通勤・通学者だが、少子化の進行で通勤・通学者の大幅な利用増加は見込めないのが現状だ。

市交通政策室は「利用者の減少がバスの減便や路線廃止などのサービス低下を引き起こし、それがさらに利用者の減少を招くという『負のスパイラル』に陥っている」と現状を分析。通勤・通学者以外の利用者の

鳥取市 利用者増期待、10月にも

増加につながるサービスの向上策を検討していた。

市は南部地域の自治会の代表者らが出席する「交通会議」で対策を議論。その中で、住民から「乗降の手伝いなどをしてくれる人がいてほしい」という趣旨の意見が多かったことから、バスアテンダントの導入に向けて検討を始めた。

バスアテンダントは、幹線と支線の乗り継ぎ拠点や、利用者の多い鳥取駅、市立病院などに配置され、乗降時に手助けが必要な高齢者や障害者のサポートをするほか、乗り継ぎの相談を受けるとして、「利用者が快適にバスを利用できるようにおもてなしのサービスをする」（同室）。今年度中の策定を目指す「南部地域新総合公共交通計画」の目玉政策として検討が進んでいる。

関連事業費が2月議会で承認されれば、導入に向けた具体的な検討に入る予定。同室の遠藤幸二主事は「減便などで地域の公共交通をこれ以上不便にしないためにも、バスに乗る人を増やすことが大切。バスアテンダントがバスの魅力アップにつながればいい」と話している。



南部地域新総合公共交通計画 鳥取市南部地域のバス路線を再編し、鉄道やタクシーなどの交通手段と連携した新しい公共交通システムの構築を目指す計画。現在の計画案では、鳥取市用瀬間の幹線の増便▽通勤、通学のための快速の新設▽バス停が遠くて不便な「交通空白地域」である佐治の一部や国英地区での予約型の小型車両運行―などが盛り込まれている。市交通政策室（0857・20・3257）は、案に関する意見やバスの利用促進に関するアイデアなどを28日まで募集している。